

家庭科教育課程についての日米比較
母親の履修経験、到達度、学習意欲、男・女子に対する必要性
聖徳学園短大 草野篤子

〈目的〉日米の母親の家庭科についての意識を検討することによって、社会・経済的環境の変化に伴う家庭生活の変容に対応できる今後の日本の家庭科教育課程のあり方、実践的・社会的貢献の方向を探る。

〈方法〉米国カンザス州マックファーソン大学 C.W. Nichols 等の 14 調査項目の中から、日本に適用できる 12 項目を選び、調査票を小学校三年生の母親に担任から子供を通じ配付、回収した（回収率 99%）。

〈結果〉日米両国共に言えることは、母親は「栄養」「献立と調理」「被服制育」について多く履修しているが、子供、特に女子には、「家族関係」「保育」といった、モノからヒトとヒトとの関係を学習する必要性を認め、「栄養」の学習も引き続き重要視している。また、男子には、「家族関係」「家庭管理」「住居」の履修希望が高くない（日本の専業主婦は、男子の「家庭管理」の必要性をあまり認めないが。）「住居」については、日米の母親ともあまり履修していないが、日本の母親が現在履修したいのは、「住居」領域での到達度について自己評価、男子・女子について必要性は、米国人の方が日本人より全領域にわたって評価が高い。日米の差異としては、米国の母親は「身づくり」について自ら履修しているが、男・女子双方が学習する必要性を認めている。